

# 先進資本主義社会の建造環境をめぐる 労働、資本、および階級闘争

デイヴィッド・ハーヴェイ

(水岡不二雄 訳)

David HARVEY

Labor, capital, and class struggle around the built environment in advanced capitalist societies  
*Politics and Society*, 6, 1976, 265-295.

この論文は、先進資本主義のもとで階級闘争がとるひとつの側面を理解するための理論的枠組を構築しようとするものである。検討するのは、建造環境の生産と使用にかかわる対抗関係である。建造環境 the built environment というとき、物的な構造の総体——住宅・道路・工場・事務所・下水道・公園・文化機関・教育施設、などといったもの——が念頭におかれている。資本主義社会には、一般的にみて、物的景観——人間によって建設された物的諸資源の集まり——を、生産と再生産の目的におおよそ適合するよう自らの姿にあわせて創造する必然性があるが、同時に、この空間を創造する過程は矛盾と緊張に満ちているために、資本主義社会における階級関係から対抗しあいぶつかりあう強い流れが出てくるのは避けられない、という点を明らかにしたいと思う。

分析をやりやすくするため、次に掲げるもののあいだにはっきりした区別があると前提しておこう。それは、(1)地代・家賃 rent [本訳では通常「家賃」と訳したが、前後関係から「地代」としたところもある。原語はいずれも同じである]を直接(地主や不動産会社のように)ないし間接(単に見返りの収益を得るためだけに不動産に投資する金融的媒介者など)に領有しようとする資本の分派、(2)建造環境のなかに新しい要素を建造することによって利子および利潤を得ようとする資本の分派(建設業界)、(3)建造環境を過剰資本のはけ口として、そして資本の生産と蓄積を強化するための使用価値の固まりとみなす資本「一般」、そして(4) 建造環境を消費手段として、そしてみずから

の再生産の手段として用いている労働者たち、のあいだである。また、建造環境は概念的に、生産用の固定資本 fixed capital 品目(工場・高速道路・鉄道などといったもの)と、消費用の消費元本 consumption fund 品目(住宅・道路・公園・歩道といったもの)とに分けることができる、ということも前提する。道路とか下水道のようなある種の品目は、その使われ方によって、固定資本としても、また消費元本の一部としても機能することができる。

本論文では、直接的生産過程において固定資本が使われるところから生ずる対抗関係ではなく、労働者たちが消費元本を使うところから生ずる対抗関係の構造に、関心を限定することとしたい。階級闘争のこの側面について分析することにより、コミュニティにおける対抗関係ならびに組織化と、産業における対抗関係ならびに仕事に基盤をもつ組織化との間の関係をめぐって悩まされる問題に、大きな光が投げかけられることになる。端的にいって、今日一般に先進資本主義の範疇にあるとみなされている諸国の歴史的発展において、労働者たちがおかれている地位と経験していることにつき、労働者たちの居住という側面、そしてまたその労働という側面から、いくらかの光をあてたいのである。事例は、合衆国とイギリスからとることとする。このテーマ全般についていくつかの予備的なコメントをしておくのが順序というものであろう。

労働者たちに対する資本の支配は、資本主義的生産様式において基本的である——つまりるところの支配なしに剰余価値を搾出することはできないであろうし、

蓄積は姿を消してしまうであろう。この支配からあらゆるたくいのことがでてくるし、また、労働者たちと建造環境との関係は、このことによるのみ理解することができるのである。もっとも重要な事実は、産業資本主義が労働過程を再編し工場制度をもたらしたことを通じ、仕事の場所と再生産ならびに消費の場所とが強制的に分離された、ということかもしれない。労働力を再生産することの必要は、かくして、世帯——家計が効率的に機能するためには建造環境の形態をとる使用価値が要求される——のなかにおける生産と消費活動の特定の集合に置き換えられる。

労働者たちがもっているニーズは歴史的に変化してきた。このニーズは、一部には家事労働によってなされようし、また一部には生産された商品と引き換えに稼いだ賃金を市場で交換することを通じて獲得されよう。労働者たちがどのような商品を必要としているかは、家計内での生産物と市場からの購買との差し引き関係に依存しているし、また、労働者たちの生活水準を規定するような環境・歴史・道徳的な配慮にも依存している<sup>2</sup>。商品の範疇において、労働者たちは、組織と階級闘争によって、栄養・健康管理・住宅・教育・レクリエーション・娯楽といったものの「適正な」水準が含み込まれるようにそのニーズの定義を変えることができる。資本の観点からすれば、蓄積には商品市場の絶えざる拡張が必要であり、このことは、労働者たちの側で、新たな社会的欲求とニーズが創造され、また「合理的消費」が組織されることを意味している。このうち後のほうの条件は、歴史的に認めることができるものを理論的に示唆している——家計は、資本主義的商品生産の拡張に直面して、それに絶えず「質して道を譲っていかざるをえないのである。「蓄積のための蓄積、生産のための生産」は、手に手をとりあって資本主義体制を推しすすめてゆき、労働者たちの消費がますます生産と商品交換からなる資本主義体制へと統合されてゆくことを必然的にもたらす<sup>3</sup>。

仕事の場所と居住の場所とが切り離されるということは、自己の存在のための社会的諸条件をコントロールするための労働者たちの闘争が、独立しているように見える二つの闘争に分断される、ということの意味している。そのうち第一のものは、職場に立地している、消費財に対する購買力を付与する賃金率と、労働条件とに関わるものである。第二のものは、居住の場所において、商人資本・土地所有者などが代表してな

される搾取と領有の二次的な形態に対して闘われる。これは、居住の場における費用と存在条件とをめぐる闘争である。そしてここでは、居住と労働という二分法が、それ自体資本主義体制によっておしつけられた人為的な分化であることを認識しつつ、この第二の種類闘争に焦点をあてる。

### 労働者たちと家賃領有者ならびに建設業界との対抗

労働者たちは、生活する場所を必要としている。土地は労働者たちにとって生活のひとつの条件であるのは、土地が資本にとって生産のひとつの条件であるのとおおかた同じことである。生産の条件としての土地から労働者たちを排除している私的所有の制度が、生活の条件としての土地からも労働者たちを排除している。マルクスが記したように、「この土地所有が、同じ人の手中で産業資本と結びつき、この産業資本が、労賃をめぐる闘争に参加する労働者たちを彼らの住居である地上から実際に締め出すことができるようにする場合に、この土地所有が与える途方もない力」である<sup>4</sup>。われわれは、生活の基礎的条件の一つとしての空間のほか、住宅・交通（仕事や施設への）・アメニティー・諸施設・そして労働者たちの生活環境の総体に貢献する諸資源の総体に関心をもっている。これらの品目のうちいくつかは、私的に領有することができる（住宅は、そのもっとも重要な例である）が、共同で利用されねばならない（歩道）ものもあるし、交通システムのように、資本と一緒に利用する場合さえある。

これらの品目の必要性のために、労働者たちは、土地所有ならびに家賃の領有と対立するようになり、また、労働者たちと、こうした商品を生産することにより利潤を追求する建設業界とが対立するようになる。これらの品目の費用と賃は、労働者たちの生活水準に影響を及ぼす。労働者たちは、その生活水準を守り向上させようとして、建造環境の創造・管理運営・そして利用に関わるさまざまな問題をめぐって居住の場所で打ち続く闘いにかかわってゆく。その例をみつめることは、むずかしくない——家主による過度の地代領有をめぐるコミュニティの対抗関係・住宅市場での投機をめぐるもの・「迷惑」施設の場所選定をめぐるもの・住宅建設の費用の膨張をめぐるもの・荒廃して行く都市インフラストラクチャーの維持にかかる費用

の膨張をめぐるもの・混雑をめぐるもの・雇用機会やサービスへのアクセシビリティの欠如をめぐるもの・高速道路建設と都市再開発をめぐるもの・そして「生活の質」と審美的な諸問題をめぐるもの——と、コミュニティの対抗関係のリストはおおよそ尽きることがないように思われる。

建造環境に焦点をあてた対抗関係には、特有の奇妙な性質がある。というのも、私的所有の編制が付与する独占力のために、その所有者は、地代を領有する力ばかりでなく、空間における「自然独占」の支配を獲得するからである<sup>9</sup>。建造環境がもつ、固定し不動であるという性質は、空間独占的競争の状況のもとでなされる商品の生産と使用について、強い「近隣」効果ないし「外部」効果を必然的に伴わざるをえない<sup>10</sup>。発生する競争の多くは、外部効果をめぐって発生するものである——ある特定の家の価値には、それを取り巻く住宅の状況によって規定される部分があるし、だから個々の所有者は、近所全体がよく手入れされているように強い関心をもって気を付けている。ブルジョア理論においては、地代の領有と不動産所有権の取引が新たな商品生産のための価格シグナルを設定し、そのなかで土地が市場過程を通じ色々な利用へと「合理的に」分配されることになる、とある。しかし、広範に広がる外部効果のために、また開発のあとに占有が起ころうという性質のために、価格シグナルはさまざまな深刻な歪曲をこうむる。その帰結として、領有者と建設の分派にとって、そしてデベロッパー・投機家・そして私的個人にとってさえも、標榜た式の利潤と独占地代をせしめるありとあらゆる機会があることになる。ひとつの階級・ひとつの分派内部での血なまぐさい対抗関係は、階級間・分派間の対抗関係と同じように、当たり前のこととなる。

しかし、ここでの関心は主として、労働者たち・家賃の領有者たち・建設の分派相互の、三面的な競争がもつ構造にある。一例として、住宅の費用と質をめぐる労働者たちと住宅所有者たちの直接的な競争を考えてみよう。住宅所有者は一般に、その所有する住宅ストックからでき得るかぎり多くの家賃を領有しようとして、手もとにあるありとあらゆる手段を使うし、その資本に対する収益率を極大化するようなやりかたで、状況にその戦略をあわせてゆこうとするであろう。もしこの収益率がきわめて高いものであるならば、新たな資本が住宅所有に参入してくるであろうし、もし取

益率がきわめて低いならば、投資の引き上げと放棄が目にあたりとなるであろう。労働者たちは、多種多様な戦略——住宅が安いところに引っ越すとか、家賃統制や住宅規則の制定とか——によって、領有に歯止めをかけ、それなりの質の住まいを確保しようとする。この競争がどのように解決されるかは、二つの集団がもつ相対的な経済力と政治力、ある特定の場所と時間に存在する供給と需要の状況、そしてそれぞれの集団が手持ちの選択可能性に、大きく依存している<sup>11</sup>。

建設業界が市場に参入して低費用で新築住宅を造成する能力によって、中古住宅から独占地代を領有する者ももつ獲得の能力は限定されることを考慮に入れると、この競争は、三次元的なものとなる。中古住宅の価格は、結局のところ、新築住宅の生産費に強く影響されている。労働者たちがその政治力を用いて、建築のために国家から助成を獲得することができるならば、この人為的に刺激された新規開発は、既存の諸資源からの領有をより少ない率に引き下げの力を持つことになる。他方、もし領有を行う者が新規開発を阻止する（例えば、土地の費用を膨らませることによって）ことができるならば、あるいは、なんらかの理由によって、もし新規開発が妨げられたならば（イギリスの計画許可手続きは、一般にこのように機能した）、領有はより高い率でなされることになる。他方、労働者たちが直接の家賃統制を通じて領有の率をうまく抑制することができたならば、貸家の価格は下落し、新たな開発に対する意欲は乏しくなり、希少性がつくりだされる。こうしたものこそ、このような状況のもとで予期されなければならない対抗関係と連合のたぐいなのである。

しかし、この対抗関係の構造は、空間にもともと備わっている「自然独占」によってより複雑なものとなる。例えば、家主がもつ独占力は、労働者たちを職場のすぐまわりに閉じこめておく畏から労働者たちが逃げ出す能力によって、部分的に変わってくる。住宅からの領有は、交通の変化にきわめて感応しやすい。より長い通勤をする能力は、一部には賃金率（通勤費の支払能力を労働者に与える）・一部には労働日の長さ（通勤時間を労働者に与える）・そして一部には交通手段の費用と利用可能性に依存している。例えば、19世紀後半のロンドンに起こった、労働者階級が住む郊外を建設するブームは、かなりの程度に、鉄道の到来と「労働者特別割引」運賃 “workman's special” fare

の提供、そして労働日の短縮によって説明することができ、これにより、少なくともいくつかの労働者階級は、職場から歩いていける距離に住むことから解放されたのであった<sup>9)</sup>。その帰結として、雇用の中心に近い住宅からなされる家賃領有率は、低下せざるをえなくなった。アメリカの諸都市の「路面電車」郊外“streetcar” suburbs や今日の労働者階級の郊外（安いエネルギーと自動車によっている）は、この現象にさらなる事例をもたらしている<sup>10)</sup>。新しい、安価な交通の形態を要求することによって、労働者たちは地理的に閉じこめられた民から逃げだすことができ、それによって優等地にある家主が独占地帯を獲得する能力を削減することができる。もちろん、空間的に閉じこめておく民と結びついた諸問題はなくなったわけではなく、われわれの時代にも、貧しい人々・お年寄り・抑圧されたマイノリティーたちのような人々が住むゲットーのなかに、それがあつた。こうした諸集団にとっては、アクセスが依然として重要な問題である<sup>10)</sup>。

家主が直接むしりとることをやめさせようとする闘争、そして生活費を安くしておこうとするうちつつく闘いから、建造環境の諸要素すべての分配・量・質にかかわって労働者たちがとる姿勢のかなりの部分が説明できる。公共施設・レクリエーションの機会・アメニティー・交通のアクセスなどがすべて、闘いの課題となる。しかし、これらの直接の関心事の底には、建造環境が労働者用の使用価値の集合として持つ意味あいそのものをめぐる深い闘争が横たわっている。

建造環境の生産者は、今も昔も、生活条件について限られた選択肢を労働者たちに提供してきたにすぎなかった。労働者たちがもっている有効需要を行使するための資源がかぼそいものでしかないなら、労働者たちは、とにかく手に入るもの——例えば、安普請で窮屈で、補修も十分行き届いていない棟刺長屋——で我慢しなければならない。有効需要が増大するにつれ、労働者たちはより広い選択肢のなかからえらびとれるようになり、その結果、「生活の質」という全体的な問題がたちあられてくる。資本一般と建造環境を生産する資本の分派とは、一定の立地点において生産して利潤をあげることでできる諸商品、というものさしで労働者たちの生活の質を定義しようと試みる。これに対し労働者たちは、生活の質を使用価値のものさしにおいてのみ定義し、そのさい人間的であるというこ

とはどういうことかについての底に横たわるもっとも基本的な考え方に拠り所を求めようとする。利潤のための生産と使用のための生産とは、しばしば両立しない。それゆえ資本主義の存続のためには、資本による労働の支配が、ただ労働過程において行われるだけでなく、消費の部面において、生活の質を定義することそのものに関して行われることが必要である。マルクスは、生産が生産するものは消費だけでなく、生産は消費の様式をも生産するのだと論じており、この消費様式こそ、労働者たちにとって消費元本とは何か、ということのすべてなのである<sup>11)</sup>。こうしたわけで、資本一般には、建造環境をめぐる闘争の帰結が労働者たち・家賃の領有者・および建設に関わる分派それぞれとの相対的力量によって決定されるのを、座して受け入れられるはずがない。資本一般は時として、この力のバランスに手をかけ、資本主義的な社会秩序の再生産に具合のよい帰結がもたらされるようにしなければならない。ここで見なくてはならなくなるのは、事柄のこの側面である。

### 建造環境をめぐる闘争への資本の介入

資本が建造環境をめぐる闘争に介入しようとするときには、通例、国家権力というでだてをつかう。先進資本主義諸国の歴史をおおざっぱに検討してみるならば、資本家階級が労働者たちに味方するときもあるし、その他の分派に味方するときもあることがわかる。しかし、歴史をみると、こうした介入には一定のパターンがあり、またその底に横たわる根拠があることがわかる。このパターンをつかむには、介入をおおきく4つの項目のもとに集約するのがよいだろう——労働者階級のための私的所有と持ち家、生活費と労働力の価値、資本蓄積が持続するのに役立つよう管理運営された労働者の共同消費、そして自然との関係・労働規律の強要のようなものに関わってきわめてこみ入っているが重要なトピック、である。このパターンについて議論することによって、この底に横たわる根拠を明らかにする手がかりが得られるであろうし、こうしたやり方をとることで、労働者が居住の場で関わっている日常的な闘争にはらまれたより深い意味を明らかにする手がかりが得られよう。

### 私的所有と労働者たちの持ち家

労働者たちが居住の場所で家賃の額有に反対して行う闘争は、私的所有がもつ独占力に反対する闘争である。労働者たちが私的所有の原理に反対する闘いを住宅という場のみ閉じ込めておくことは、たやすくはない。そして、「家賃と賃金との間の関係についての難問題……が、資本と労働との関係にたやすく入り込んでくる」<sup>12</sup>。このため、全体としての資本家階級は、この闘争を無視することができない。資本家たちには、私的所有の原理を神聖に保っておくことに利益がある。借家人と家主との間の大きく広がった闘争——借家人は公的所有・公営化のようなものを要求する——は、私的所有の原理全体を疑問にさらすことになる。それゆえ、個人の持ち家を広げることは、資本家階級にとって利益である。というのは、このことにより労働者階級の少なくとも一部が味方に誘いこまれることになるし、「所有的个人主義」の倫理が高まり、労働者階級は、持ち家保有者と借家人という「住宅階級」へと分断されてゆくからである<sup>13</sup>。このことにより資本家階級は、公的所有と国有化の要求に反対するのに都合よく使えるイデオロギーのテコを手に入れる。なぜなら、このような提案には労働者からその私的に所有する住宅をもぎとってしまう意図がある、と聞こえるようにするのはたやすいからである。

しかしながら、持ち家保有者の大多数は、自分の住宅の完全な所有者だというわけではない。住宅ローンの利子を支払っている。このことから金融資本は、住宅市場の機能にかかわって主導権を握る地位に座ることになる——この地位をうまく利用するのがいやいやながらであるはずはない<sup>14</sup>。労働者たちは、住宅について私的小所有の形態に参入するようみえるが、これは、実際のところ、おおかた正反対——貨幣資本が消費元のなかで支配的な地位に参入してくるということ——なのである。金融資本は、住宅における新規投資の配置と率とをコントロールするばかりでなく、慢性的な不動産債務を通じて、労働者たちをもコントロールする。ローンにとっふりと浸った労働者たちは、たいてい、社会の安定の支柱なのであって、労働者階級に持ち家をすすめる政策には、この基本的な事実の理解がずっとあった。そしてこのことと引き換えに、労働者たちはきわめてゆっくりと、不動産に資産をいかほどか形成してゆけるのである。

この最後に検討した点は、いくつかの重要な帰結をもたらすことになる。労働者たちは、その貯蓄を不動

産の物的な形態につきこむ。労働者たちはいうまでもなく、この貯蓄の価値を維持し、できることなら拡張したいと考えている。持ち家は、小土地所有制にもつながりうる。小土地所有制は伝統的に、個々の労働者が、他の労働者を犠牲にして価値を領有するきわめて重要な手段となってきた。しかし、より重要なのは、建造環境のなかで外部費用と便益のパターンが変化して行くために、どの持ち家保有者も、好むと好まざるとにかかわらず、価値の領有をめぐる闘争にとらえこまれる、ということである。新しい道路はある住宅の価値を破壊する一方で他の住宅の価値を増大させるかもしれないし、同じことは、新規開発・再開発・陳腐化の促進といったあらゆるありかたにあてはまる。

建造環境のどの特定の要素とくらべてみても、住宅市場こそ量的にもっとも重要な市場である。このことだけからしても、労働者たちがこうした外部効果と関係をもつありかたは、決定的な意味をもっている。労働者階級の一部は持ち家をめざし、その資産価値を守ろうとし、できることならばそれを増大させようと執心している。こうしたときに、合衆国での郊外と都市中心との間の政治的緊張を、労働者階級内部に生じたこの分断化を認識しないで理解するのは、きわめて難しいであろう。アメリカの諸都市の「コミュニティ」の内部にあまねく広がる社会的緊張にも、同様の影響がおよんでいる。端的にいって持ち家は、労働者階級の一つの分派を、資本主義社会における価値領有をめぐる全く違った闘争を展開せざるをえないように誘い込んで行く。持ち家保有者は私的所有の原理の味方になり、労働者階級の他の分派の犠牲において価値を領有するように仕向けられてゆくことがしばしばとなる。資本一般はこれほど素晴らしい分割統治の手段を意のままに繰るのだから、土地に権益を持つ者と対抗するとき労働者に味方しても、決して驚いてはいけぬ。資本一般は、労働者たちを生産の基礎的諸条件の一つへのアクセスから切り離すとき土地所有を継りにしたのだったが、階級闘争にぶつかった私的所有の原理を無傷のまま維持しようとする段になると、資本一般は労働者たちに、消費手段としての土地と不動産の部分的な所有者として地表に戻ってよいと許しを出したかのようになるのである。

#### 生活費と賃金率

マルクスの議論によれば、労働力の価値を規定する

ものは、労働力を再生産するために必要な諸商品の価値である。このエレガントな同値関係は、価格決定の範囲になると消え去るが、そうはいつでも賃金は、世帯を再生産するために不可欠なこれら諸商品を獲得するための費用との間に関係をもっている。

地主があまりに大きな率で地代・家賃を領有すれば、労働者たちの生活費は上昇する。これはより高い賃金要求をひきおこし、かちとられたならば、資本の蓄積率を引き下げる効果を生むことになるかもしれない。それゆえ資本一般は、過度の領有に反対する闘争において労働者たちに味方し、住宅のような基礎的商品の生産費を引き下げようとするかもしれない。資本家たちは必ずから、産業革命の初期に特徴的だった「模範コミュニティー」にみられるような、安価な住宅を供給しようとするかもしれない。あるいは資本家たちは、安価で補助金のついた公営住宅によって支払い賃金引き下げの余地が作り出されるのならば、これを要求する労働者たちに味方させるかもしれない。これと同じ理由から資本家階級は、総合的な土地利用計画の諸政策・ニュータウン建設プログラムといったものを通じて、建造物生産の産業化と建造環境生産の合理化を、国家のなかだちを通じ推進しようとするかもしれない。しかしながら、資本家たちがこうしたことに関心を抱きがちになるのは、労働者たちが、その組織された集団の力により、賃金を生活費に結びつけられる地位にある時だけである。

これらの諸条件は、労働力の再生産と緊密な関連を持つ建造環境（そして社会サービスならびに社会的支出）のすべての要素について、あてはまる。公的に供給されるもの（これは、住宅以外の大部分の公的供給物で、つい最近までは交通も含まれた）は、地元の産業界が注意深く見守るなかで、費用に敏感な都市当局によって監視されているかもしれない。そして、ニューヨークで1930年代と1970年代に起こったような非常事態にあっては、金融資本の諸機関の直接の監督下にさえおかれる。労働力の再生産費を最小に保とうとして、総体としての資本家階級は、建造環境における投資と領有の諸過程に介入するための共同的手段を探し求めるかもしれない。資本主義の初期において、プロレタリアートがしばしば、土地に権益を持つ者に対立した勃興しつつある産業ブルジョアジーの味方をしたのと同様、先進資本主義社会においては、資本一般が、地代・家賃の過度の領有と新規開発費用の高騰に

反対している労働者たちの味方をするのがよくある。この連合は、利他的に作り出されるものではなく、賃金率と労働力の再生産費との関係から、有機的に発生するものなのである。

#### 「合理的」で、管理され、共同でなされる消費

労働者たちは、その賃金で資本家たちが生産した消費手段を購入することによって、商品流通を媒介する。労働者の側がその購買力を、資本主義的な生産および実現の体制からみて、どうやっても合理的に使えないならば、商品の流通は断ち切られる。資本主義発展の初期には、これはさほど大きな問題でなかった。というものは、非資本主義社会との交易によって、有効需要の隙間はなんとか埋まったからである。しかし、先進資本主義へと移るにつれ、賃金労働力によってもたらされる内包的な市場が、ますます大きな重要性を持つようになる。そしてまた、生活水準が上昇し、労働者たちがますます多くの商品を用いることができるようになるにつれ、消費の「非合理性」からくる潜在的な崩壊の可能性も増大する。有効需要をうまく使うのに失敗するところから、恐慌が起こるかもしれない。そしていうまでもなくケインズが、一定の条件のもとで、利潤率の低下として現れる恐慌から抜け出すには、賃金を切り下げののではなく賃金を増大させて市場を拡大すればよいのだ、ということを経済学に示して大きな功績をあげたのであった。

だがこのことには、労働者たちがその賃金を「合理的に」支出するという前提がある。もし、アダム・スミスがいうように、人類は「つまらない安物」に対して無限で尽きることのない欲求をもっている、と前提するならば問題はないであろう。しかしマルサスは、人類社会の歴史が「奢侈品及び便宜品に対する有効な嗜好が、すなわち適当に勤労を刺激する如き嗜好が、必要とされる瞬間に現れるばかりになっていることなく、緩慢に成長するものであることは、……十分にこれを証示している」<sup>10</sup>と見てとり、このことと別のおそれをあらわに示した。マルクスが自信をもって断言したように、生産は消費と消費様式を生産するであろう。だが、それは自動的になされるのではなく、生産により消費と消費様式が生産されるやり方は、絶えざる闘争と対抗関係の場となっているのである。

まずはじめに、資本主義生産と家計との関係を考えてみよう。1810年の合衆国においては、例えば「歴史家

が使うことのできるもつともすぐれた史料によれば……着衣のおよそ三分の二……は家庭内で生産されたものであった」が、1860年までには、ニューイングランドの繊維産業という形態であられた産業革命が、こうしたことすべてを変えてしまった——「産業生産と市場経済の発展によって、家庭内での生産は蚕食されてしまった」<sup>18)</sup>。伝統的に家事労働と結びついていた諸活動は、一步一步と資本主義的市場経済のなかへと放り込まれていった——パン焼き・醸造・食品保存・調理・食品の下ごしらえ・洗濯・掃除・そして育児や子供たちを社会に馴染らすことすらそうなっていったのである。そして建造環境についていえば、住宅建設とメンテナンスが市場経済に統合されるようになる。19世紀の合衆国では、かなりの人々が、自分の家を、みずからの労働と地元の原料で建てていた。今日では、ほとんどすべての住戸が市場制度を通じて建造されている。

工場制度の出現は、家計にとってみれば、両刃の剣であった。一方でそれは、家庭から給与所得者（の人々）を排出させた。産業資本主義の初期にあって、それは一日12時間ないし14時間に及んだし、とりわけて搾取のきつい状況のもとでは、世帯の全員——男性と並んで女性と子供も——を、賃金労働力のなかにたたき込んだ（このやり方によって、世帯の賃金は、賃金率が下がっていったにもかかわらず安定した状態に保つことができた）。こうした初期のころのことについて、E. P. トンプソンは次のように書いている。すなわち「産業の分化と特化がひとつの段階にさしかかるといつも、家庭経済にも打撃が及んだ。夫と妻・両親と子供との伝統的な関係はかき乱され、『労働』と『居住』との間の差異はより激しいものとなった。この差異が、労働節約のための機器という果実として働く女性の家庭にかえてくるまで、ゆうに100年は待たねばならなかった」<sup>19)</sup>。

この、商品が世帯に「戻って」くるのが、剣のもうひとつの刃である。工場制度は、家事労働と比べてより安くより少ない努力で、消費のための使用価値物を生産した。工場制度による使用価値物は標準化された生産物の形態をとっているにしても、家事労働力によるものよりすくなくともより豊富にあるはずだし、それゆえに労働者たちの生活水準を上昇させる物質的基礎をなすのである。このようなことは、産業資本主義の初期にはふつう起こらなかった。いうまでもなく、

労働者たちはより長い時間労働し、より少ない使用価値を受け取ったことであろう（とはいえ後者の点については、証拠が部分的であり、論争が起こっている）<sup>20)</sup>。しかし、蓄積とともに発生する労働生産力の上昇・それに応じて生ずる内包的な市場を確立させる必要・そして1世紀以上にわたる階級闘争は、これらすべてを変えてしまった。耐久消費財と消費元本の品目（住宅のような）は、経済においてきわめて重要な成長部門となり、生活水準が上昇するための政治的な条件と物質的基礎は、むろんのこと達成された。

家事労働を工場の労働で代替するという労働者たちの経験には、それゆえ、肯定的側面と否定的側面の両方があることになる。しかしそのような代替は、容易に達成できない。なぜならこの代替には、家族の性質と構造・社会における女性の役割・刻み込まれた伝統のようなものが関わっているからである。この代替は、それ自体がひとつの闘争の焦点である。資本蓄積との関わりで商品を合理的に消費するということには、家事労働と市場での購買との間に、ある種の均斉がとれていることが含意されている。家事労働のかわりに市場の購買で代替するための闘争が重要であるのは、この闘争の帰結が、商品の側面で、使用価値の意味そのものと労働者たちにとっての生活水準とを規定するからである。建造環境の建設は、それゆえ、生活と生存のあり方総体をめぐる闘争の脈絡においてとらえられなければならない。

説得というテクニクが、先進資本主義社会において、合理的消費を確実なものとするために広く用いられている。しばしば、道徳的な訓戒や博愛事業が「労働者の精神的道徳的能力の改善により彼の状態を高め彼を合理的な消費者にする」<sup>21)</sup>ために用いられる。教会・新聞・そして学校は、真に自律的な労働者階級の発展のための手立てとなることができるが、同時に、合理的な消費のためにも動員できる。そして、広告業者の甘言とマジソン街のテクニクが、常に存在する。

「労働者たちの生活水準」はこれらのテクニクに影響されたことがない、というふりをしてもむだというものだ。しかし、ここでもまた、両刃の剣が関わってくる。これらのテクニクは、マルクスが「文明化作用」と呼んだものを労働者たちに及ぼすかもしれないし、労働者たちみずからが、自身を物的・精神的福利の新しい状態に引きあげ、ひるがえって階級闘争の新しくより堅固な基盤をきずくために使うかもしれない

い<sup>20</sup>。逆に、みずからの状態を改善しようとする労働者たちの動きは、労働者たちにとって真の人間的必要を反映するものとして使用価値を規定するのではなく、資本蓄積に都合のよいようにそれを規定しようとする、さまざまな策略によって阻まれるかもしれない。例えば、住いに対する人間的な要求は、住宅生産をつうじた蓄積過程になりかわる。

合理的消費はまた、消費の共同化によっても保障することができる<sup>20</sup>。これを保証するのは、唯一国家だけというわけではないが、主として国家がその仲立ちをしている。健康管理・住宅・教育・そしてあらゆる種類の社会サービスに対する労働者階級の要求は、ふつう政治の回路を通じて表明され、政府はこれら諸要求を仲裁して蓄積の必要とうまく調和させようとする。これら諸要求の多くは、共同的な財とサービスの供給によって満たされる。これは、好きでも嫌いでも、誰もがみんなそれを消費することを意味している。資本主義体制は、ますます消費の共同化に向かってきた。というのは、ケインズ主義的な財政政策においてははっきり理解されているように、蓄積の利益のために消費をうまく管理する必要があるからである。共同化によって、消費者の選択は、統制されない個人の行為がもつ無政府性から、統制がよりやりやすいようにみえる国家企業の場合へ、と移しかえられる。この移しかえには、個人の選択の自由（これは、強い反官僚的感情を作り出す）・ならびにかかわってくる使用価値物をどう決めるかということ（例えば、国防対貧困層のための補助金つき住宅）をめぐる競争がつきものである。

建造環境は、これらすべてについて、独特で重要な役割をはたす。建造環境を構成している諸資源のあつまり——街路と歩道・排水溝と下水システム・公園と遊び場——は、共同で消費される要素をたくさん含んでいる。このような公共財の公共の手による供給は、共同消費の「自然的」形態であって、資本は国家をなかだちとして容易にこれらに踏み込んで、これらを取り込んでしまうことができる。また、諸個人が行う私的な意思決定の合計は、公共的な効果を持つ。なぜなら、あまねく広がる外部効果により、共同消費のある種の形態が、私的な行為を通じそれ自体として強要されることになるからである——私が庭をきれいにしておかないのを、私の隣人が見ずすますというわけにはゆかない。建造環境は、共同の管理運営と統制を必要としている。それゆえ、何が蓄積のためになるのか・

また何が人々のためになるのかをめぐって、建造環境が資本と労働との闘争の場になることは、ほとんど避けがたいといってよい。

イギリスと合衆国では、1890年ごろから、建造環境への集計的総投資の中に占める消費元本の割合が、ますます増大していった<sup>20</sup>。とりわけ住宅部門は、経済成長を安定させるマクロ経済政策の主要な道具となった。このことは、ケインズ主義的レギュレーターとして住宅部門が公然と利用された合衆国において、とりわけあてはまる（常に成功したとはいえないことを、付け加えておくべきであろう）。そして、強い乗数効果も考えに入れておくべきである。例えば、住宅建設は、建造環境のその他の側面・ならびに幅広い種類の耐久消費財に対する補完的な投資を必要としている。この乗数は、設計やその他の考慮に依じて大きく変わるが、いずれにせよかなりのものである。

これらの乗数は、建造環境がわれわれの日常生活に与えることもある「強制力」と関連づけて考えてみると、さらに重要になってくる。その寿命の長さ・空間への固着性・ならびにその財源をまかない償却する方法からすれば、建造環境がいったん作り出されてしまえば、それがあらわしている価値を失わないようにしようとするかぎり、その建造環境を使い続けなければならない。資本主義の社会関係のもとで、建造環境は人間労働の人工的な構成物となり、この人工的構成物はいずれひるがえって日常生活を支配する。資本は、建造環境を、蓄積を持続させることを助ける強制力として動員しようとする。例えば、都市がクルマで移動するように建造されているならば、好むと好まざるとにかかわらず、「通常に」生活しようとする人はクルマで移動しなければならない。合衆国の高速道路ロビー、自動車・石油・ゴム産業、および建設業界は、アメリカの地表を変え、その生産物の消費が合理的に成長する保障を得るために、建造環境の強制力を用いたのである<sup>20</sup>。しかし労働者たちは、このような圧力に気づかなかつたわけではない。資本が押し付けてくる使用価値物の編成に対して、労働者たちは抵抗することもできようし、労働者たちの目的とニーズに合うように転形することもできよう——自動車は、例えば、逃げだすための手段となる（この点についてはすぐに次で考察する）。

資本主義は生き延びてきた。そのかぎりでは資本の労働への支配は、労働の場のみならず居住の場において

も行われており、このことは、蓄積ならびに商品生産の必要と調和するような建造環境の創造を通じ、労働者たちの生活水準と生活の質を決定することによってなされたものである、と結論せざるをえない。この点を強調することは、労働者たちが個々の問題で勝利できない、といおうとするものではないし、蓄積の必要にうまくはまるような労働者たちにとっての使用価値というものの定義はたった一つしか存在しない、といおうとするものでもない。可能性は数えきれないほどある。だがそうはいっても、資本が許容することのできる限界をはっきりと規定されている。労働者たちにとって、この限界のなかでの闘争はなるほど大事であるが、この限界をこえて進もうとするところからこそ、真の闘争が始まるのである。

### 労働の社会化、および自然との関係

労働と居住とを互いにまったく切り離してしまうことはできない。職場で発生していることを、居住の場で忘れてしまうことはできない。とはいえ、われわれはこの二つの間の関係について、きわめて乏しい理解しかもっていない<sup>26</sup>。「建造環境における労働者たちにとっての使用価値」の定義は、労働の経験から独立して与えられるものではない。以下で、このことについて2つのきわめて基本的な側面を考察することにした。

工場制度の出現が、社会生活のなかにきわめて特別な適応の必要を作り出したことは、えてして忘れられがちである。工場制度は、田舎の小農と独立した職人を、価値増殖するように設計されたシステムのひとつの歯車にかえた。労働者は、「物」——資本家の欲望のままに生産過程で用いられる、単なる「生産要素」——となった。しかし、この新しい「経済秩序」は、「蓄積への欲求も利欲心もなく、収入を最大限にしようとする意欲もなくて、ただその日暮しのために働き慣れている人々を、金銭的な刺激に順応させ、かつ与えられた刺激に対し正確に反応するという、そうした方向に向けて、彼らを従順にする」ことを必要としていた。労働者たちを新しい生産様式に馴らすこと、労働規律を植え付けること、そしてそれに伴って起こるすべてのことをなすのは、容易なことではなかったし、いまでも容易ではない。その結果、「現代の産業的無産階級は人を魅了する力とか、ないしは金銭的な報酬というよりも、むしろ強制とか強要、そして恐怖心によって、

その果たすべき役割の中へとひき込まれたのである。それは、隅当たりのよい庭にいるような成長は許されなかった。それは、火によって、強力なハンマーの打撃によって鍛えられた<sup>27</sup>。このことが、引き続き階級闘争のありかたと形態に与えた帰結には、きわめて大きいものがあった。そして、ブレイヴアマンが指摘したように、「世代ごとに労働者を資本主義的生産様式に馴らすことが必要となる」<sup>28</sup>。

労働規律を植え付けることは、一部に、職場での訓練・脅迫・おだてによってなしとげられた。これらは効果的であったが、それだけでは十分でなかった。産業資本主義の初期にあって、この問題はとりわけ深刻であった。というのは、資本主義はいまだ、「資本主義的な近代生活の網の目を張りめぐらして……他のすべての生産様式を不可能にしてしまうような網を、紡ぎ終えてはいなかったからである<sup>29</sup>。こうして資本の側から、労働者階級に、正直さ・責任感・権威の尊重・法や秩序への服従・財産権や契約上の合意の尊重、といった「労働の倫理」と「ブルジョアの価値観」を植え付けようとする動きが開始された。労働者階級の価値観への集中攻撃は、一部に、宗教的・教育的・博愛的な回路を通じて行われ、そこに産業家たちの温情主義がしばしば強い影響を与えた。しかしこのことについては、われわれのとりわけ大きな関心をそそる、もうひとつの様相がある。とりわけ初期の産業家たちは、工場の内部と外部の両方で、労働者たちを相手にしなければならなかったのである：

それゆえ、全人格を改革するための努力は、環境全体がただ一人の雇主の支配下におかれていた工場町および工場村でとりわけ顕著であった。ここには、産業革命の主要な発展のいくつかが輪廻的に示されていた。すなわち、こうした居住区は産業企業家によってその基礎が据えられていたが、その存在理由のすべては彼の利益を求めたためのものであり、その政治と法律は彼の掌中にあり、そこでの生活の中身は彼の気まぐれによって左右され、そして居住区の究極的な目標は、彼のイメージの中に描かれていたのである……。作業員を激しく鞭打つタイプの雇い主と、模範的なコミュニティーの建設者との間では外見上その差は大きい。しかし「労働者の統制」という視点からすれば、工場管理の二つのタイプは、いずれも規律の強制という点で、同一の関心を示しているといえる<sup>30</sup>。

この、生活の場における統制を通じて労働者たちを労働過程へと社会化してゆく必要は、資本主義にゆき

がたいものであるが、これは新しい種類の労働過程が導入されたときとりわけ明瞭となる。ヘンリー・フォードが1914年に導入した組立工程の労働者に対する5ドル・8時間労働は、清教徒のレトリックを多用し「博愛主義的」な統制システムを伴ったもので、労働者たちの生活のほとんどすべての側面に影響を及ぼした。すなわち、

30人以上の監督官のスタッフが……労働者たちの家を訪れ、情報を収集して、家計のやりくり・食卓・暮らしかた・余暇・社会的な前途の見込み・および道徳性などについて情報を集め、細かくアドバイスをしていった……。英語を学ぶことを拒否したり、監督官のアドバイスに応じなかったり、賭博をしたり、飲酒が過ぎたり、あるいは「どんなものであれ、健康な身体や道徳性を辱めるような悪しき行い」をしているという罪が明らかになった場合には、5ドルの賃金を受け取る資格を失う……<sup>30</sup>。

グラムシのフォーディズムに関するコメントは、するどい<sup>31</sup>。資本蓄積の歴史のこの点において、「労働と生産過程の新しい型に即応して、人間の新しい型を創出することの必然性」が現れたのである。グラムシが論じたように、この転形は、強圧と説得との巧みな組み合わせによってのみ達成することができた——このうち説得には、高賃金、「各種の社会福祉、巧妙ななイデオロギー的政治宣伝」が含まれていた。フォードの清教徒的で社会的な統制の運動は、「新しい生産方法によって搾取される労働者の生理的破壊を防ぐ一種の精神・肉体間の均衡を、労働の外部で保持する」目的をもっていた。労働者たちは、持っている貨幣を「その筋肉と神経の効率は……維持、更新し、さらにできるだけ増進させるために、合理的に」つかわなくてはならなかった。アルコールやセックスのかかわる活動に向けられた激しい攻撃は、「生活と労働の新しいシステムに必要な習慣や道徳」を植え付けるための総合的な努力の一部をなすものであった。フォーディズムの導入を取りまいていたさまざまな出来事は、資本が生活の場において、職場での必要に即した人づくりを行おうとする試みの、古典的な例なのである。

ここでの関心は、いうまでもなく、産業家一般・そしてとりわけコミュニティの建設にたずさわった人々が、どのようにしてその労働者たちの生活の質を規定し、またどのようにしてブルジョア的価値観や「責任感ある」産業労働の規律を植え付ける全般的な戦略

の一環として建造環境を用いたのか、理解するところにある。私的所有と社会的安定をしっかりと尊重させるため労働者階級に持ち家を促すところに、このことの現代版があることについては、すでに指摘しておいた——この結びつきは、19世紀初期の合衆国において認められたものである<sup>32</sup>。しかし、ここでみたいのは、生活の場におけるより直接的な統制の形態である。例えばペンダーは、ローウェル Lowell の紡績女工を住まわせるために建設された寮が「田舎の家族と同様の機能をはたし」、ニューイングランドの農家を出て工場へと引き寄せられた女工たちにとっての「効果的な適応メカニズム」として作用したことを示唆している<sup>33</sup>。こうした新しい生活スタイルに適応しようとしないうか、それができない人々に対処するためにつくられた諸施設の設計と機能とをみると、同じ点がしばしばつきりする。早くもエリザベス女王の時代に、失業と気遣いとは同じものだとみなされていたし、産業資本主義の出現の結果、身体の病気とは仕事に行けないことと定義されるようになった。イギリスの状況においてポラードが、またアメリカの状況においてロースマンが、主要な社会的諸施設——収容所・授産所・感化院・病院・そして学校ですら——と工場制度とのあいだには、レイアウトとそのなかでの規律の組織とについて強い類似がある、という関連を指摘している。例えば、ジャクソン時代のアメリカで囚人を社会復帰させるということは、囚人たちを産業労働の規律にながしか類似したものにおいて社会化する、ということの意味していた<sup>34</sup>。

労働と生活との間になんらかの関係があるということ、そして生活の方を操作すれば労働の方になんらかの影響を及ぼせるかもしれないということ、資本家階級が見逃すはずはなかった。先進資本主義諸国の歴史においてうちづくテーマの一つに、労働者たちの満足感・従順さ・そして効率を高めるように生活の場所を改良する、ということの追求があったのである。この種のプログラムは、模範的なコミュニティーというものにきわめて明瞭にあらわれている。ジョージ・ブルマンは1880年に、のちに失敗する運命にあった実験をし、みずからの名前を冠した町を建造した。それは、

よりすぐれた類型の労働者をひきつけ、そして引き止めておき、またひるがえってこうした物的な環境条件におかれ

ることによりこの労働者たちが「高められ洗練される」ようにするためであった。このことにより従業員は満足し、それによって欠勤・飲酒・怠業を減らすことができるであろう。さらに、このような労働者たちは、都市のスラムにいたる墮落した労働者とくらべ、「アジテーター」たちの説得に引きずられることがより少ないものと期待された。彼の頃は、不穏な労資関係とストライキから会社を守ってくれよう<sup>20</sup>。

そして、付け加えておかねばならないのは、この事業全体が、投下資本に対し6%の利潤をあげるとされていたことである。1894年のプルマンのストライキは、このような夢にふさわしい墓碑銘を刻むものであった。資本家が、労働者たちの生活に対し職場においても生活の場においても直接の一律な統制を加えることは、非常に危険な問題であることが示されたのである。

プルマンのストライキは、19世紀を通じて資本主義的生産者たちがいずれにせよ徐々にわかってきたことを確認したにすぎなかった。生活の場で資本と労働が直接に対抗することが階級的な緊張と葛藤を悪化させるのは、はっきりしている。なぜなら、労働者たちに、敵は誰か容易にわかるからである——社宅であろうと、社内の売店であろうと、会社の厚生サービスであろうと、あるいは職場それ自体であろうと、そうである。最大級に激しいストライキや対決のいくつか——1892年のホームステッド、1894年のプルマンのような——が企業町で起こったのは決して偶然ではなかった。状況がこうなれば、資本主義的生産者たちにとっては、労働者たちの不満の標的を散らしながら影響を与えるやり方を探し求めたほうが都合よい。住宅供給を民営化すること・家主階級を別に創造すること・小売りならびに卸売り部門に数えきれない中間商人を作り出すこと・社会サービスと公共財を政府が供給すること、といったことすべてがこのことを達成するでたとなった。これらの諸施策は、労働力の再生産費の一部を社会化する役にも立ち、また労働の移動性を容易にする役にも立った。こうした一連の理由から、産業資本家たちは、建造環境を直接供給したり管理運営したりすることから足をすっぱり洗おうとするようになったのである。

プルマンが心に描いていた一般的な命題は、温情主義や、窮乏で一律な直接の統制という側面を切り離しそれ自体としてみれば、いぜん重要性を持っている。新しい作業規律を、いやがら小農や職人たちに押し付

けなくてはならないのだから、ふるい社会的秩序を縛り付けるくびきを断ち切る必要があるのは明らかだった。しかし、これを断ち切ることでそれ自体から社会的統制にとっての問題がでてきて、新しい秩序の経済的・社会的安定を、さまざまなかたちで脅かすことになった。ブルジョア改良主義者たちは、このような脅威に対抗しようとした。そして、労働者たちが満ち足り、道徳的になり、志操堅固な市民として仕事の任務を効率的にこなす能力をもってそれを行い、資本蓄積を強化するという本分をつくすために、適正な住宅・健康管理・教育といったものが不可欠である、と長い間論じてきた<sup>21</sup>。反対に、スラムや過密・すべての者のすべての者に対する闘い、「道徳的墮落」や悪のしるし・不潔な土ほこりや病氣、といったものがある典型的な産業都市は、品行方正な労働者階級の市民性の形成をもたらすものでないといまされたのである。この改革戦略は、どちらかといえば単純な発想の環境決定論に依拠することもあった——よい住宅がよい労働者を作り出すという考え方は、ブルジョアの改良主義の思想の舞台に時折あらわれたが、結局あまり効果がないのが通例だった。しかし、より手のこんだ形態で、社会的安定の再確立とかなり満ち足りた労働力を創造する実績をもつやり方を使うことで、ブルジョアの改良は労働と居住とを関係づける糸口を見だし、この関係を組織づけられることを証明したのである。そして、このための努力をしつつ、改良主義者たちは、労働者たちにとっての建造環境における使用価値の意味をある種のやり方で定義した。資本は——今度は間接的に、ブルジョアの改良とイデオロギー的・政治的メカニズムの手段によって——介入しようとする。なぜなら、そうすることはみずからの目的の役に立つし、労働者たちとの歴史的な闘争において、資本の持ち札をより強いのものとするからである。しかし、プルマンのストライキに刻まれた墓碑銘が示すように、労働者たちは常に、進んでおとなしく、こうしたもののパートナーとして操られているわけではない。

このことから、資本主義社会における労働と居住との結びつきについて、第2の側面がでてくる。マルクスはその唯物論の立場から、自然との関係を、人間に関わる諸事象を秩序だてるもつとも基本的な関係とみなしていた。この関係は主として、自然から得られる原料を使用価値物に転形する労働過程を通じてあらわになる。それゆえマルクスは、この労働過程を組織す

る様式——生産様式——を、その考察の基礎に置いた。このように考えるからといって、単純化された経済決定論にくみしようというのではない。自然との関係は人間の諸事象にとってもっとも基本的な側面である、という命題を提起しようとしているにすぎない。産業資本主義が工場制度で身を固めて組織した労働過程は、自然と人間との関係を、むかしあった限定された姿とくらべてすら滑稽なものに転形してしまった。労働者たちが「物」へと引き下げられてしまったために、労働者はその生産物から・それを生産するやり方から・そして究極的には自然そのものから、疎外されることになった<sup>40</sup>。

こうした労働過程には墮落し「不自然」などころがあるということ、ブルジョア的意識にとってすら明らかだった。いうまでもなく、工場制度の組織はブルジョアジーにとっても不自然に見えた。日常生活をブルジョアジーの統括下で生き延びなければならない人々が不自然と感じたのとまさに同じである。レイモンド・ウィリアムズが指摘しているとおり、土地資本は産業革命よりはるかに以前にこの理解にたどりついていた。すなわち、

彼らの大庭園を「アルカディア風の眺望」にしたあける際に問題となったのは、庭園の境界のむこうに農業用地や文字どおりの牧畜用地を擁する体制が完成しているかどうかであった……。[これら]は、同一の過程の関連しあっていた各部分としてあるのだ——見相反する審美観のようにみえる。しかしそれも、一方の土地は生産用として、借地人や労働者を働かせる場として組織され、他方は消費用に……組織されているからにはほかならない。このような18世紀の人工風景に関して、これこそ土地ブルジョアの芸術の本質的な点であると評することもできる。むろんその通りだが、ただそれだけではない。窓やテラスの下にひろがる大地の中に……田園風景の創出に成功したということが、できる。つまり、生産に関わる事実は……、きれいさっぱり追放されていた<sup>41</sup>。

産業資本主義の出現とともに、ブルジョアジーには、他人のために生産の部面で組織したものに、自らの消費の部面において積極的な逆襲をしようという切望がいっそう強まった。イギリスのロマン主義の詩人たちが——ワーズワースとクーリージが代表的である——、ならびに合衆国のエマーソンやソローのような作家たちは、この新しい産業秩序に反対する行為を繪画的に表現した。しかもこの反対する行為は、イデオ

ロギーの担い手という範囲のなかだけにとどまらなかった。それは実践され、ブルジョアジーたちは、田舎に農場を作り、田園に邸宅を建て、産業都市から逃げだしたし、究極的には、ウォーカーが「郊外化による解決 suburban solution」と呼んだ構想を実践した<sup>42</sup>。20世紀のイアン・マクハーグとルイス・マンフォードや、19世紀におけるオルムステッドやエベンザー・ハワードのような計画家や作家の手になる「都市に自然を取り戻そう」とする試みは、このテーマがブルジョア思想とその実践の中に打ち続けていることを証明している<sup>43</sup>。

しかし、これを感じたのがブルジョアジーなら、この自然からの疎外をきわめて具体的に経験していたのは、職人たちと追い出された小農たちであって、こうした人々は、負けず劣らずこの疎外にできるかぎり反対をするよう行為した。職人階級の代弁者であったウィリアム・ブレイクは「薄暗い悪魔のような工場」について苦々しく不平を述べたて、持ち前の革命的熱情をもって「緑に満ちた素敵ないングランドの土地にエルサレムを建設する」と誓ったのである。工場での労働過程がもっと野蠻化と墮落化をもたらすような単調な作業手順に直面し、労働者たち自身も改善の道をさぐった。労働者たちの一部は、ブルジョアジーと同様の神秘化にたよってその改善をめざし、共通の自然についてのロマン主義的イメージを共有するようになった。なぜローウェルの女工たちがこれほど自然美について書くのか、ときかれて、女工新聞の編集者は次のように返答した。「砂漠をゆく旅行者が、はるかに広がる焼けつくような荒野にあって、その目の前に緑したたるオアシスを思い描かなかつたらいったいどうなるのでしょうか」<sup>44</sup>。しかし、工場という砂漠のただ中でロマン主義的な観念化された自然を思い描くだけでは、それが長い退屈な一日を労働者たちが過ごすのをどれほど助けても、およそ十分ではななかった。かくして、ペンダーが報告しているように「ローウェルの住民たちはさまざまのやり方で、折にふれて自然景観と触れ合い、それを愛するようになった。墓地や公園を利用するほか、住民たちは、自然を求めてさまざまの工夫を働かせ、窓から景色を眺めたり、都市の外に散歩に出掛けたり（立入禁止の掲示にもかかわらず……）、そして夏には田園を訪れたりした」<sup>45</sup>。

このような対応が、神秘化に基礎を置いていたことはいうまでもない。なぜならこの対応は「自然」を余

暇時間の概念におとしめ、人間が行う全活動のうちのもっとも基礎——労働——での退廃した自然との関係から回復しようとして休養する際「消費」すべきものへとおとしめたからである。しかしこの神秘化は、社会のすべての要素に関わる意識に深く食い入っていた。いまや、自然との関係を語るということは、採炭切り羽・組立ライン・工場といった、自然の真の転形が絶えず鍛えだされているところから遠く離れて、山や清流・海や湖・林や緑の野原といったイメージを思い浮かべるといふ意味になっている。

しかし、ある意味でこれは、資本主義のもので必然的に避けたい神秘化である。この神秘化がなかったなら、生活にはほとんど耐えられないであろう。そして、ブルジョアジーの進歩的な部分には、このことが、自分たちにとってと同様に労働者たちにもあてはまることわかっていて、それゆえブルジョア改革者たちは、道徳的普遍性やロマンティックなイメージというかりそめの姿で、しばしば労働者たちに「自然」に対するおてごころなアクセスを保障しようとした。おそらくもつとも目をみはらせる 19 世紀アメリカの改革者であるオルムステッドは「労働者たちから自発的に生まれる興味は、どんな人為的に課せられた統治・管理より、もっとも効果的に労働への刺激を与えてくれる」とみていたし、このことから、都市の産業生活の日常に疲れ切ったことの解毒剤として公園や林間に広がる郊外を提唱するところへは、ほんの一步があるにすぎなかった<sup>44</sup>。この、都市の産業生活の諸問題に対する解決策は実行に移された。オルムステッドの時代には主として中産階級のために、そして現代にはますます「品性のよい」労働者階級のために実行されたこの策は、われわれの都市の物的景観に強い影響力を及ぼしてきた。自然——田舎の田園的イメージによって代表される——と、都市ならびに産業によって代表される労働過程との間にあるこの対位法は、資本主義的生産様式の歴史の中心をなすものである。そして、この対位法の中には、レイモンド・ウィリアムズが「なくてはならぬ物質主義となくてはならぬ人間性」と呼んだ緊張関係がはらまれている。ウィリアムズはつづけていう：

よくあることだが、この問題を解決しようとして、仕事と余暇、社会と個人、都会と田舎を分ける。ただ観念的に分けるのではなく、郊外と田園都市、市中の家と田舎の別荘、

平日と週末という形で分けるのである。ところがわれわれよりも早く……改造の指揮官たちがやってきていて、土地に深く根をおろしてしまっていることを知る、というのが深く相違である。何を隔そう彼らの方が、われわれ以上に自己分割に成功しているのである。……カントリー・ハウスなるものは、この一時的解決の初期的形態のひとつであった。19 世紀には、かつての……領主たち……のカントリー・ハウスが昔のまま、あるいは手入れされて残っていたが、こうした昔からのものとはほぼ同数のカントリー・ハウスが、資本主義的生産の新しい領主たちによって新築された。このカントリー・ハウスの居住形態が物理的な模倣の対象となり、二軒長屋式の別荘建築の細部や、余暇や週末の過ごし方にまで及んでいることはやはり注目に値する。巨大な生産力をもつ資本主義はあらゆる段階において、そこに生み出されたさまざまな結果に反応する形式を、いかに不均等であるとはいえ、提供しかつ含むような手段を様式を発展させてきている<sup>45</sup>。

こうした「反応する形式」は、建造環境の中にある使用価値が労働者たちにとって何を意味するか規定する役割を、部分的にはたしている。今日の郊外に居住する人々は、労働者であろうとブルジョアジーであろうと、例えば「生産の事実」を人々の視界から消し去ろうとすることについて、18 世紀の地主たちと同様に熱心である。というのも、こうした事実は、ほとんど耐えがたいものばかりだからである。そして、まさにこれやっつける道を労働者たちが資本家たちと手を組んでうまく見つけたことで、ひとつの都市景観が創造されてきたし、ウィリアムズが「実質的でおおいかぶさってくるような神秘化」——必要性と悲惨な悪ふざけという二つの契機とを結びつけるような神秘化だが——と呼んだものに基礎をおく生活のやり方が創造されてきたのである。疎外されない自然との関係という観念にこだわることだけからでも、生活は労働者にとって耐えていけるものになる。なぜならこの観念は、失われてしまったものと獲得できるかもしれない潜在性をもつものに対し、現実的な価値判断をすることにつながってゆくからである。しかし、自然のロマン主義的な神秘化は、資本主義社会にあまねく広がっている喪失と疎外の感情にある実際の根源を、明らかにするかわりに覆い隠す。ブルジョア美術・文学・都市デザイン・および「都市居住のためのデザイン」といったものは、居住の場において、職場で真の補償が決してできないものをかわりに補償してやるといふある種の状況をつくりだす。端的にいうと資本は、

労働者たちを、ファウストの取引のようなものへと引き込んで行こうとする。すなわち、職場にある疎外し退廃をもたらすような自然との関係に対する正当かつ適切な補償として、居住の場にある自然との関係についてのパッケージを受け入れよ、という取引である。そして、どんなやり方でそそのかされ、ご機嫌をとられ、そしてブルジョアジーがどんなに支配的イデオロギーを動員するにもかかわらず、労働者たちがこの取引に応ずることを拒否するならば、資本はこれを押し付けなければならない。なぜなら、資本主義社会の景観は、結局のところ、労働者たちのほかでもない真の人間の必要に対応したものではなく、資本の蓄積要求に対応したものでなければならないからである。

### 資本の介入：ひとつの結論

資本は、工場と同じように、家庭でも労働者たちを規律しようとする。なぜなら、資本主義の労働過程が要求せざるをえない「労働の倫理」および「ブルジョアの価値観」は、労働者たちの生活のあらゆる部面をすべて包括的に支配することによってのみ創造され確保されるからである。労働者たちに持ち家をもたせれば、労働者たちは私的所有の原理に対してはもっとり忠誠を誓うようになり、この全体的な戦略の流れののってくる。こうした動きと時に衝突しつつ、資本には、蓄積の観点からみて安価で合理的なように労働者たちの消費を組織する必要があることがわかる。消費の共同化は個人責任の概念をとり去りがちであるので、行きすぎれば、ブルジョア個人主義の考え方は掘りくずされてしまう。そしてこれらすべてに対抗する流れとして、労働者たちからの自発的な協力を生み、職場での効率につながるような満足感と充実感をもたらし必要が資本の側にあることを見て取れる。労働者たちに、生活の場には選択の自由があるような幻想だけでも与え、また消費の部面には健康で満足すべき自然との関係があるような幻想だけでも与えておかなければ、こうした状況をうまく育ててゆけない。こうした幻想はあまねく広がっているが、それを、蓄積のための蓄積・生産のための生産という必要に迫られた現実と直面して維持しとおすすめが難しいこともある。そして、どんなに山のような神秘化がなされたとしても、職場での諸状況を覆い隠しておくことは決して容易にできるものではない。

とはいえ、労働者たちが自らの置かれた状況に対し

てとる対応は、資本の介入と媒介とに絶えずさらされている。工場労働の退廃と規律とを補償するために、労働者たちがその生活様式を組織し直そうとしているまさにそのとき、資本もまた、こうした努力を転倒させ、みずからの目的のためとりこんでうまく利用しようとする。時としてこのことは、階級闘争のなかで、労働者たちに対する残忍な対抗に転化する。労働者たちは、生活費を切り下げ、それが支配しうる使用価値物を増大させることで生活水準を上昇させようとするが、資本は、しばしば国家のなかだちを通じてこの動きをひっくり返し、労働力の価値の切り下げをはかり、蓄積の観点から理解して「合理的」な消費様式とされるものへと変えてゆこうと、絶えず試みる。労働者たちが、職場における退廃した自然との関係からの救いを求めようとするまさにそのとき、資本はそれを、消費の場における自然との関係を神秘化するためにうまく利用しようとするのである。労働者たちが、その存在のための共同的諸条件をより強くコントロールしようとしていてるまさにそのとき、資本は消費の共同化された形態と個人の持ち家とを確立しようとするのである。資本の力は「労働者たちにとっての建造環境の使用価値」の定義そのものの中に、あまねく存在している。

居住の場における対抗関係は、資本と労働とのあいだに横たわる緊張関係の単なる反映にすぎない、と結論できる。領有者と建設業の分派が、対抗関係の諸形態を媒介する——こうした人々は資本と労働のあいだに立ち、真の緊張関係の源を視野から蔽い隠す。建造環境をめぐる対抗関係の表面的外観——家主に対する闘争・都市再開発に対する闘争——は、資本と労働との闘争にほかならないものの本質をおおい隠してしまうのである。

資本がこのような闘争の中にあまねく存在しているとしても、それは全知でもなければ全能でもない。蓄積のダイナミクスにはときおり恐慌を通じた合理化が必要であり、恐慌は労働者階級に、大きく広がる失業という発作の形態で影響を与える。このとき、生活の場での充実した自然との関係によって、また「健康的で満足のゆく」生活環境を供給することによって、労働者たちを取り込もうとする計画は、失敗におわる。建造環境を消費に対する強制の道具として用いることで、資本は自らを強制することになる。なぜなら、建造環境は、文字どおりコンクリートという具体

concrete の大構のなかに、価値実現の条件を設定するからである。そして、いったんかかわると、資本はもはや戻れない。ブルマンは、この初歩的な事実を、彼が模範としてつくった不幸な運命におわった町で発見したのである。経済全体のなかに過剰蓄積の状況が明らかになったとき、労働者を一時解雇させることが必要となったが、ブルマンにはそれができなかった。なぜなら、この町から利潤を得るには、工場における完全雇用という条件が満たされなければならなかったからである。個々の資本家がこの問題を解決するには、自らが雇用する労働者たちのための消費元本品目の生産から手を引けばよい。しかし、資本主義体制全体にとっての問題は残る。過剰蓄積の問題が資本主義社会に発生すると——この過剰蓄積はいずれ発生せざるをえないのであるが——、資本家の計画がどんなにうまくたてられていても途中で挫折し、神秘化・取り込み・労働者たちの締め付け・そして労働倫理とブルジョア道徳を植え付けるためのメカニズムが、もろくも崩れはじめる。まさにこのとき、労働者たちは、資本との間にとりつけたはずの取引は取引でもなんでもなく、観念的な神秘化のうえに据えられたにすぎないものだったことを知るのである。資本の約束は、まさにそれだけのものではなく、果たすことが不可能であることがわかる。そして、建造環境における使用価値に対して労働者たちがいかにニーズを、あれほど多く約束しながらこれほど少ししか果たさないこの体制の親玉が満たすことはできないことも、はっきりとしてくるのである。

### 階級意識、コミュニティ意識、および競争

「労働者たちの生活水準」というフレーズを、労働と居住双方の組織をめぐるある特定の場所で長期間にわたって闘われた階級闘争がもつ現実の脈絡からはずれて理解することができないのは、明らかである。この水準は常に変わり、それが建造環境における使用価値——消費元本品目——とかかわった労働者たちのニーズを規定している。個々の労働者は、その労働力における地位・その家庭状況・その個人的な必要に応じて、いうまでもなくさまざまなニーズを持っている。同時に、職場での賃金率決定の諸過程により、異なった職業の範疇にある労働者は、異なった量の交換価値を稼ぐことになる。この貨幣があらわす社会的な力は、

建造環境の中にある一定の使用価値物に対してコントロールを確保するために用いることができる。このような貨幣の用いられ方は、地代の領有・ならびに価格シグナルが資本フローを新たな消費元本品目へと引き寄せるさいの機能に影響を与える。われわれは、3つの一般的な状況を念頭に浮かべることができよう。

第1に、おのおのの労働者が独立して、自分自身で使うための最も優れた資源のバスケットを最優等の立地点で支配しようとする状況を考えてみよう。すべての者がすべての者と闘って競争し、「所有的個人主義」の倫理が労働者たちの意識のなかに最も根本的なありかたで根付いてしまっている社会が、念頭に浮かんでくる。建造環境のなかにある利用可能な使用価値が限られているという通常の場合ならば、個々人はその市場力を利用し、最優等の立地点にある希少資源をめざして付け値を行う。いちばん基本的なレベルで、これは生き残りの機会をめぐる競争である。なぜなら、おのおのの労働者は、その生き残りの可能性が、適度の衛生状態にめくられた立地点にある特定の資源バスケットに対するアクセスを確保できるかどうかにかかっていると知っているからである。「市場能力 market capacity」——労働者がみずからの労働力を平均以上の高い賃金率で販売することができるようにするための競争もある。地位・格位・バスケット——を獲得するための競争もある。地位・格位・身分・そして重要性（自尊心さえも）のシンボルは、格式ある立地点である特定の資源を支配することにより獲得できるであろう。こうしたシンボルは、労働者たちが、資金労働力のなかでとりわけ格式ある階層に入りこもうとすることを容易にする手助けをしてくれるかもしれない。そしておしまいに、職場での自然との関係が退廃的であるという事実がまっとうに感じられるならば、景観の中にどんな「生産の事実」も全く認められないほどはるか遠くに立地点を求めるといった積極的な動機がある、というものである。言葉をかえれば、労働者たちは職場からできうるかぎり離れたところを獲得しようとして競争することになるかもしれない（自動車が、この目的にとりわけて役に立つことは明らかである）。

ここに概括した状況は、その大部分の側面において、都市域における土地利用決定について新古典派モデルが前提しているものと同一である。こうしたモデルの前提によれば、個々の世帯は、ある予算制約のもとで、特定の立地点に特定の財のバスケットを求めて互

いに競争しあうことにより、その効用を最大化しようと努力する。競争の対象となる2つの最も重要な「財」が、より低い集計的運輸費をもつ立地点と居住空間である、と前提されるならば、諸個人が次のものにしたがって空間上に分布することを示すのは、比較的容易にできる。すなわち、(1)雇用機会の分布で、これは通例ひとつの中心的立地点に集まっているものと前提される。そして、(2)運輸サービスならびに居住空間に対する相対的な限界消費性向で、これは全体の予算制約において規定されるものである。こうした条件のもとでなされる競争的な付け値は、差額地代平面を作り出すことになる。この平面は、雇用中心が一つしかない場合、中心からの距離に応じて低下しつつ、同時に、諸個人を所得に応じ空間の中に分布させる。この場合、差額地代を領有する可能性は、労働者階級の内部における競争的行動によってもっぱら作り出されることになる。また、新規開発が、こうした差額地代によって設定された価格シグナルに典型的に反応して分布するならば、建造環境を構成する空間構造が労働力の社会的・資金的な階層化をおおいた反映するようにつくりだされることは、容易に示される。

考察したい第2の状況は、空間における共同行為——地域社会運動——が重要というものである。あまねく広がる外部効果と、建造環境において多数の品目が共同で利用されるといふことからして、ほどほどのレベルでの共同行為を追求することは、個人々の自己利益にかなうものである<sup>40</sup>。持ち家を保有している労働者であれば、その家と結びついた貯蓄の価値が他者の行為に依存していることを知っている。「逸脱した」行動にブレーキをかけ、「迷惑」施設を阻止し、そして高い水準の公共サービスを確保しようと共同することは、こうした人々の共通の利益にかなっている。こうした行為の共同化は、個人の純粋な自己利益から必要とされるものを大きく超えることがある。場所の意識、「住民意識」が、希少な公共投資資金をめぐる地域社会間の競争を引き起こす強い営力として頭をもたげてくるかもしれない。地域社会の競争が、日常茶飯事となる。

この過程と地代の領有とは、興味深い関わりあひ方をする。地域社会の手で統制がなされるということは、統制する立場にある住民の手で、建造環境への投資に対する障壁が築かれることを意味する。この障壁は、選別的——例えば低所得者の住宅を排除するというよ

うに——であるかもしれないし、あるいは全体を多かれ少なかれ含みこみ、どんな形態の将来の成長をも阻止しようとするものであるかもしれない。この種の行為は、近年、合衆国の郊外の行政域に共通に見られるものとなってきた。地元自治体のカルテルの力が、さまざまな法的手段やプランニングの手段を通じて、投資を統制するため事実上動員される。持ち家の保有者は、こうした統制を、その不動産の価値を維持ないし増大させるために利用しようとするであろう。デベロッパは、このような統制を、どちらかという違った目的で用いようとするかもしれない。しかし「住民意識」は一般に法的な小「島」をつくりあげ、そのなかでしばしば、労働者の一つの分派が、他の分派の犠牲において独占地代を領有する。この状況から、労働者階級の内部に、地域社会に基盤をおく偏狭な流れにそって内輪の対抗関係が生まれる。こうした条件のもとで、都市の空間構造は、個人的な競争によってつくりだされたものと比べ大きく違ったものとなる。

念頭に浮かぶ第3の状況は、職場であろうと居住の場であろうと、階級意識に全面的に目覚めたプロレタリアートが、あらゆる形態の搾取に対して闘争する、というものである。労働者たちは、その社会的な力量を個人的解決を求めて個人的に使おうとはしないし、生き残りの機会を求める競争・市場能力の獲得を求める競争・地位と格式の象徴を求める競争を互いにたたかたりしない。労働者たちは共同で、あらゆる場所にいるすべての労働者たちの命運を改善するために闘い、労働者たちのある分派が他の分派（通例、貧困者と思われない人々）の犠牲のもとに利益を得ることにつながる偏狭な住民運動の形態を一掃する。

こうした状況のもとでは、地代の領有を、労働者個人ないし地域社会全体の競争的な行動のせいにするにはできない。地代はむしろ、階級闘争のなりゆきのなかで労働者たちに押し付けられたしるものとして理解しなくてはならなくなる。都市域において差額地代平面があらわれるとしても、それは、労働者たちが自発的に付け値競争に関わるからではなく、領有者たちが、その階級的な力を、できるかぎり多額の地代を搾出するために用いようとしているからである。資源が希少でかつそれが相対空間のなかに存在するという条件があれば、そうなる。その結果として空間に生ずる社会的階層化（所得に応じた）と、この社会的秩序付けを強調するような開発過程とが目のあたりになって

いる以上、われわれはこのことを、労働者個人が市場を通して「主観的効用」を表明したものの単なる反映であると推論することはできない。それは、まったく正反対のことを表現したものでさえあるかもしれない——個々の労働者の考えや信念がどんなものであるかにお構いなく、領有者の力が、労働者にある一定の選択を強要するのである。地代を領有する力は、ひとつの階級関係である。われわれが、都市のなかで居住分画がどのようにしてあらわれるかを理解し、この現象がどの程度に自由な選択によるものでどの程度に強制された選択によるものかを理解しようとするならば、そのように理解しなければならない。

われわれが検討した3つの状況——競争的個人主義・住民運動・および階級闘争——は、いろいろな可能性からなる連続体の上にある点である。この連続体のどこか特定の点に労働者たちが存在する、という前提を自動的におくことはできない。こうしたことは、特定の状況の具体的な調査を通じてみつけたさなくてはならないことがらである。例えば合衆国では、ヨーロッパにいる階級意識により目覚めた労働者階級と比較して、より強く競争的個人主義と地域社会意識が支配しているように見える。資本の立場からすれば、個人の競争と地域社会の競争は具合がよい。というのは、このことにより、地代の領有が、領有者みずからの行為に由来するものではなく労働者自身の行為の帰結である、という外観をとることになるからである。それゆえ、建造環境をめぐる対抗関係の顕示的な形態は、この闘争にとりくむ人々の意識をめぐる、より深くしばしば隠れたイデオロギー闘争の帰結に依存することになる。個人・地域社会・そして階級的連帯と意識との間にあるこのより深い闘争が、日常的な問題をめぐる日常的な闘争が起こる情況をもたらすのである。

## ひとつの結論

資本主義的生産様式は、労働と居住との分離を強制すると同時に、それを複雑なやり方で再び統合する。今日の都市産業社会における対抗関係の表面的外観が示唆するものは、職場での闘争と居住の場での闘争という二元性が実際に存在し、そしておのおの種類の闘争は異なった原理・原則によって闘われる、ということである。本論文が焦点をあててきた、労働者たちにとっての消費元本をめぐる闘争は、家賃を追求する

領有者・利潤を追求する建設業・利子を追求する金融業者・そして居住の場での二次的な搾取に対抗しようとする労働者たち、それぞれの間にある避けがたい緊張関係から発生するように見える。こうしたことすべては、あまりに自明のことのように見える。

しかし、こうした日常的にはっきりと認められる対抗関係のありかたと形態は、より深いところにおいてその表明を見極めることがより難しい緊張関係——使用価値・労働者たちの生活水準・生活の質・意識・そして人間の本性それ自体、といったものすべて意味と定義をめぐる闘争——のひとつの反映なのである。この立場からして、われわれが分析に手を染めた、家賃領有者・建設業者・および労働者たちそれぞれの間にとたかわれる顕示的な闘争は、深い底に横たわる資本と労働との間の対抗関係が、媒介を受けて表明されたものとみなければならない。資本は、労働生産性につながるような、また資本が利潤をもって生産できる商品の消費につながるような定義を追い求め、またこれにつながるような意味を押し付けようとする。ディケンズの『ドンビー父子』にあるように、資本は「生皮 hides を売りさばくことはあっても決して真心 hearts を売りさばくことはない」のである。だが、労働者たちはそのみずからの意味を、足早にかき消えつつある職人と小農のくらしの記憶のなかにさがし求め、しかしまた、何が人間的であるかについて学ばねばならないという避けがたい至上命令のなかにもそれをさがし求めてゆく。それゆえ、「人間の本性」は普遍的な意味をもつものでなく、それは容赦ない闘争の炎のなかで永遠に燐なおされ続けてゆくのである。そして、たとえ資本が支配し、われわれにすぐれて資本主義的な人間の本性についての意味を押し付けるとしても、これに対する抵抗はいたるところにあるし、資本主義的秩序の内部での緊張関係——私的領有と社会的生産との間の緊張関係・個人主義と社会的相互依存との間の緊張関係——があまりにも劇的であるため、われわれはそれぞれ、現在の行いの内面に、希望と怖れとかなる、まさに大きな動揺をいだくことになる。その結果として生ずる人間の本性は、その欲望・必要・創造性・離反・利己主義・そしてまがいもない人間としての関心事、といった点で複雑な曖昧さをもっているにもかかわらず、日常的にはっきりと認められる闘争を纏りなしてゆく物それ自体を形成するのである。同様にして、こうした闘争がたたかわれるありかたは、

闘争の担い手がいく意識——場合により、個人としてであれ、地域社会としてであれ、あるいは階級を基盤としたものであれ——がより深いところで行う決定に依存している。この立場からすれば、労働と居住との間の分離は、たかだか表面的な離反にすぎないのであり、決して分けておけないものがばらばらになっているのは見かけにすぎないことがはっきりしたに違いない。そしてまた、この深いレベルにおいてこそ、労働に基盤をもつ対抗関係と「地域社会」に基盤をもつ対抗関係との底に横たわる統一をよりはっきりと認めることができるようになる。これらは決して単に互いの鏡像をなすものではなく、歪んだ表現であって、この歪みは、資本主義的生産様式が根をおろす基礎の底に横たわる根本的な階級対立を神秘化し曖昧化しようとして入りこむたくさんの営力と状況にと謀介されてでてくるのである。そして、科学に課せられた任務が、日常生活において神秘化され曖昧化されたものを、分析を通じて明らかにしてゆくところにあるのは、いうまでもない。

私は、本論文の初期の草稿に対してディック・ウォーカーが加えた批判的コメントに、多くのものを負っている。彼の思想と業績が、さまざまな形で（そのうちのいくつかは、無意識のうちにあることは間違いない）本論文でとりあげた諸問題についての私の理解に貢献してきたことも、付け加えておくべきであろう。

## 注

- 1) この区別は、マルクスに由来するものである。Karl Marx, *Das Kapital* 2. Bd., Berlin: Dietz Verlag, 1963, S.209 (資本論解説委員会訳『資本論』第6分冊、新日本出版社、1985年、327ページ)および Karl Marx, *Grundrisse der Kritik der politischen ökonomie*, Berlin: Dietz Verlag, 1963, S.672-679 (訳『資本論草稿集』第2分冊、大月書店、1993年、454-466ページ)参照。
- 2) Marx, *Das Kapital* 1. Bd., Berlin: Dietz Verlag, 1962, S. 185 (訳『資本論』第2分冊、292ページ)参照。
- 3) この条件は、Marx, *Das Kapital* 1. Bd., S.617-670における分析と、2. Bd., S.415, 510-511 (訳『資本論』第4分冊 1014-1100ページ；第7分冊 665-696, 837-838ページ)の分析とを合わせることで、マルクス主義理論から直接導きだすことができる。

- 4) Marx, *Das Kapital* 3. Bd., Berlin: Dietz Verlag, 1964, S.781-782 (訳『資本論』第13分冊、1348ページ)。
- 5) *Ibid.*, 第37章。
- 6) David Harvey, *Social Justice and the City*, London: Edward Arnold, 1973. (竹内啓一・松本正美共訳『都市と社会的平等』日本ブリタニカ、1980年)第2章と第5章参照。
- 7) より詳しい議論については、David Harvey, "Class-Monopoly Rent, Finance Capital and the Urban Revolution", *Regional Studies* 8, 1974, pp. 239-55 (福田泰雄訳『階級独占地、金融資本、都市革命』、所収 水岡不二雄監訳『都市の資本論：都市空間形成の歴史と理論』青木書店、1991年、第3章)参照。
- 8) John R. Kallet, *The Impact of Railways on Victorian Cities*, London: Routledge & K. Paul, 1969, 第11章。
- 9) G.R. Taylor, "The Beginnings of Mass Transportation in Urban America", *The Smithsonian Journal of History*, 1, nos. 1-2, pp. 35-60, 31-54; J. Tarr, "From City to Suburb: The Moral Influence of Transportation Technology," in *American Urban History*, ed. Alexander B. Callow, New York: Oxford University Press, 1973; David R. Ward, *Cities and Immigrants*, New York: Oxford University Press, 1971.
- 10) ロサンゼルスに1964年起ったワッツ暴動に関するマッコーン委員会報告書は、交通に対するアクセスの欠如から生じた因われの感情に、その不満の多くが由来するものとした。
- 11) Marx, *Grundrisse*, 序文 (訳『資本論草稿集』第1分冊)。
- 12) Counter Information Services, *The Recurrent Crisis of London* (CIS, 52 Saftesbury Ave., London, W.1.)に引用。
- 13) C. B. McPherson, *The Political Theory of Possessive Individualism*, Oxford: Clarendon Press, 1962 (藤野渉ほか訳『所有的个人主義の政治理論』合同出版、1980年)；J. Rex and T. Moore, *Race, Community and Conflict*, London: Oxford University Press, 1975.
- 14) M. Stone, "Housing and Class Struggle", *Antipode*, 7(2), 1975; David Harvey, "The Political Economy of Urbanization in Advanced Capitalist Societies: The Case of the United States", in *The Social Economy of Cities*, ed. G. Gappert and H. Rose, Beverley Hills: Urban Affairs Annual, 9, 1975
- 15) マルクス主義理論における価値と価格との関係は、きわめて多くの問題を含むものであり、有名な「転形問題」がかかわってくる。愚かしい誤りを選けるため、労働力の価値は、資金率によっておのずとあらわされるものではないことを、心にとめておくことが重要である。
- 16) T. R. Malthus, *Principles of Political Economy*, 2nd. ed., New York: Kelley Reprint, 1836, p. 321 (吉田秀夫訳『経済学原理』下、岩波書店、1937年、196ページ。)
- 17) Marx, *Grundrisse*, 序文 (訳『資本論草稿集』第1分冊)。

- 18) Thomas Bender, *Toward an Urban Vision: Ideas and Institutions in Nineteenth Century America*, Lexington, KY: University Press of Kentucky, 1975, pp.28-29; R. M. Tryon, *Household Manufacturers in the United States, 1640-1860*, Chicago: University of Chicago Press, 1917.
- 19) E. P. Thompson, *The Making of the English Working Class*, Harmondsworth, Middlesex: Penguin, 1968, p. 455.
- 20) *Ibid.*, 第 10 章; E. J. Hobsbawm, *Labouring Men*, London: *Weidenfeld and Nicolson*, 1964, 第 7 章。
- 21) Marx, *Das Kapital*, 2. Bd., S. 611 (訳『資本論』第 7 分冊、838 ページ)。デッケンズは『*Hard Times*』のなかで、ブルジョアジーの博愛主義がもつ役割を、労働者の消費との関係で皮肉った。
- 22) Marx, *Grundrisse* S. 311-313 (訳『資本論草稿集』第 2 分冊、16-18 ページ)。<sup>1)</sup> [ハヴウェイの原注では「Marx, *Capital*, p. 408」]とだけ記されていて、巻数の表示がない。英語版 408 ページ周辺に本文と関連した記述のある『*Grundrisse*』の誤記ではないかと思われるので、同書の関連ページを示しておく。]
- 23) 共同消費 *collective consumption* というテーマは、フランスの都市学者の手でいくぶん詳細に分析されてきた。E. Prestecaille, *Equipments Collectifs, Structures Urbaines et Consommation Sociale*, Paris: Centre de Sociologie Urbaine, 1975; および M. Castells, "Collective Consumption and Urban Contradictions in Advanced Capitalist Societies", in *Patterns of Advanced Societies*, ed. L. Lindberg, New York, 1975 (古原直樹訳「先進資本主義における集合的消費と都市矛盾」、所収 石川淳志監訳『都市・階級・権力』法政大学出版局、1989 年) 参照。
- 24) S. Kuznets, *Capital in the American Economy: Its Formation and Financing*, Princeton, NJ: Princeton University Press, 1961.
- 25) J. Flink, *The Car Culture*, Cambridge, MA: M.I.T. Press, 1975; および H. Leavitt, *Superhighway—Super Hoax*, Garden City, NY: Doubleday, 1970 による説明を参照。
- 26) このことを考察する試みとして興味深いのは、J. E. Vance, "Housing the Worker: The Employment Linkage as a Force in Urban Structure", *Economic Geography* 42, 1966, pp.294-325 である。
- 27) S. Pollard, *The Genesis of Modern Management*, Cambridge: Harvard University Press, 1965, pp. 161, 207 (山下幸夫ほか訳『現代企業管理の起源—イギリスにおける産業革命の研究』千倉書房、1982 年、236, 309 ページ)。
- 28) Harry Braverman, *Labor and Monopoly Capital*, New York: Monthly Review Press, 1974, p.139 (富沢賢治訳『労働と独占資本』岩波書店、1978 年、157 ページ)。
- 29) *Ibid.*, p. 151 (上掲訳書、169 ページ)。
- 30) Pollard, *Modern Management*, p. 115 (訳『現代企業管理の起源』292-3 ページ)。
- 31) Flink, *Car Culture*, p. 89.
- 32) 以下の引用はすべて Antonio Gramsci, *Selections from the Prison Notebooks*, London, 1971, pp. 285-318 (中村丈夫訳「アメリカニズムとフォード主義」所収 山崎功監訳『グラムシ選集』第 3 巻、合同出版社、1962 年、24, 23, 44, 45, 40 ページ) であることができる。
- 33) Bender, *Urban Vision*, p. 197.
- 34) *Ibid.*, p. 63.
- 35) Michael Foucault, *Madness and Civilization*, New York: Pantheon Books, 1965; Pollard, *Modern Management*, p.162 (訳『現代企業管理の起源』237 ページ); Samuel Bowles and H. Gintis, *Schooling in Capitalist America*, New York: Basic Books, 1975 参照。学校と工場との関係については、Charles Dickens, *Hard Times* (松本 泰・恵子翻案『鉄の扉』<『デッケンズ物語全集』第 8 巻>中央公論社、1936-37 年) が、なみはずれた洞察力をもって語っている。
- 36) S. Buder, *Pullman*, New York: Oxford University Press, 1967, p. 44
- 37) このことについての資料ならびに議論の多くの部分は、R. A. Walker, "The Suburban Solution" (Ph. D. diss., Department of Geography and Environmental Engineering, Johns Hopkins University, Baltimore, 1976) からとったものである。
- 38) Karl Marx, *Marx-Engels Werke* Band 40, Berlin: Dietz Verlag, 1968, (訳「1844 年の経済学・哲学手稿」所収 大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス・エンゲルス全集』第 40 巻、大月書店、1975 年)。A. Schmidt, *Marx's Concept of Nature*, London, 1971 (元浜崎海訳『マルクスの自然観念』法政大学出版局、1972 年) をも参照せよ。
- 39) R. Williams, *The Country and the City*, London: Oxford University Press, 1973, p. 124 (山本和乎ほか訳『田舎と都会』晶文社、1985 年、170 ページ)。
- 40) R. Walker, "The Suburban Solution".
- 41) Ebenezer Howard, *Garden Cities of Tomorrow*, London, 1965 (長束進訳『明日の田園都市』鹿島出版会、1968 年) は、例えば、「田園都市が発展するときには、自然の自由な恵み、すなわち新鮮な空気・太陽の光・休息室と娯楽室が、必要な豊かさですべて保有されるように田園都市をレイアウトし、人工が自然を補足し、生活が永続する喜びと楽しさに満ちたものになるように、近代科学の粋を集め、」と書いている (p. 127, 訳 208 ページ)。
- 42) Bender, *Urban Vision*, p. 90.
- 43) *Ibid.*
- 44) ベンダーは、オルムステッドの思想のこの側面を、詳細に論じている。
- 45) Williams, *Country and the City*, p. 294 (訳『田舎と都会』388 ページ)。
- 46) Anthony Giddens, *The Class Structure of the Advanced Societies*, London: Harper and Row, 1973, p. 103 (市川純

洋訳『先進社会の階級構造』みすず書房、1977年、101ページ)参照。

- 47) 例えば、W. Alonso, *Location and Land Use*, Cambridge: Harvard University Press, 1964 (大石泰彦監訳・折下功訳『立地と土地利用』朝倉書店、1966年); および E. S. Mills, *Studies in the Structure of the Urban Economy*, Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1972 を参照。
- 48) 自己利益本位の共同行為についての理論は、Mancur Olson, *The Logic of Collective Action*, Cambridge: Harvard University Press, 1965 に提示されている。しかし、地域社会についての理論は混乱状態で、相当の仕分けを必要とするであろう。
- 49) 私は、このテーマについての予備的な分析を、David Harvey, "Class Structure in a Capitalist Society and the Theory of Residential Differentiation", in *Processes in Physical and Human Geography*, ed. M. Chisholm, P. Hagget, and R. F. Peel, London, 1975 (小田宏信訳「階級構造と居住分化の理論」、所収 前掲『都市の資本論』第5章)で試みたことがある。

自由学塾協会誌

1977

新刊の自由塾

自由塾  
自由塾  
自由塾

自由塾  
自由塾